

郎萬葉集に字仲郎といふあり、輩行を字といふ事、いと古よりありこし也けり、玉葉に、字伊豫内侍、字辨内侍などいふ事のみゆるは、今はよび名といふにや、十訓抄に、南都の舞師に、字和博士晴遠といふ人あり、宇治拾遺物語に、ぬす人の大將軍保輔が、保昌朝臣に、あざな、はかまだれといはれ候といへるは、此時のすまひのつく、なのりといふ物、またぬす人ばくち打のつく、あだ名といふものに似たり、字はやがて、その異名のうつれるにて、本義ならんかし、又日本紀には、億計天皇、賢○仁諱大爲字島郎とありしよな、彼紀は漢風にかきたる所多かれど、こゝはその例にもあらで、自餘天皇不言諱字、至此天皇獨自書者、據舊本耳とあるは、はやく此紀よりもさきに、亥か漢風なる史もありしなりけり、こは文飾にて實にあらず、いにしへ王たちの御名、かならずしも一つに限らざりける物なれば、億計、大爲島郎、みな御名なり、諱にも字にもあらず、おもひまがふ事なけれ、

〔善庵隨筆〕今ノ俗名トイヘルモノ、吾日本ニテ、古ヘ字トイフモノニ當ル、萬葉集第十六、本朝世紀、奥羽軍記等ニ載スル所證スベシ、本朝世紀康治二年記曰、六月十三日戊戌、源賴盛、字檜垣三郎、源惟正、字達三郎、忽企合戰云々中古文政行ハレシヨリ、播紳家モ、文アレンバ、漢土ニ擬シテ、名ノ外ニ字トイフモノ出來ス、左レドモ爵位官職ト實名ニテ通用スレバ、人毎ニ字アルニモ非ズ、好事ノ上ヨリ私ニ文詞上ニ稱セシマデナリ、故ニ鎌倉時代ノ頃マデハ、民間ニテ、ヤハリ今ノ俗名ヲ字ト稱セシコト、古文書等ニ毎々見ユ、慶元以來、文人學士ハ、必ズ俗名ノ外ニ、唐人同様ニ字アルコトナレバ、今更ニ古ノ例ヲ用ヒテ、俗名ヲ字トモイヒガタシ、左レバトテ俗名俗稱ノ字ハ、和漢トモ所見ナシ、因テタゞ、稱□□□ト書キタラバ、當リサハリ無カルベシ、

〔名字辨〕萬葉集十六に、○中土師宿禰水道、字曰志婢麻呂、又吉田連老、字曰石麻呂、なごあれど、いづれも字と云ものにはあらざるべし、續紀寶龜七年正月、九年二月、十年二月などに、吉田連古麻呂